百周年記念映像制作におけるプランと考察

篠原　瑛[†]　　高橋　敬隆[†]　　星　健太郎[‡]
†早稲田大学　商学部　‡早稲田大学 大学院 国際情報通信研究科
E-mail:e.shino@suou.waseda.jp

1.　まえがき

従来，大学における記念映像制作は，アナログ技術を基にしており，非常に限られた専門・技術者集団・業者に委託されていた．そのため，大学の関係者，特に学生の関わる領域は少なかった．デジタル時代を迎え，映像制作に必要な情報機器・機材・ソフトウェアなどは比較的安価なものとなってきており，またその使用するに当たり必要とされる技術にも配慮がなされてきている．このため，記念映像制作に学生・教職員など部内の関係者が直接編集などに関わることが可能になった．しかし，体系的な教育や訓練を受けた専門技術者ではないため，様々な困難や問題点に直面することは大いに考えられることである．

本発表では，早稲田大学商学部 100 周年記念映像作品（以下，本作品と呼ぶ）を例にとり記念映像を制作するにあたって直面した実際的な問題点とその解決方法を報告する．記念映像を制作するにあたる上でのフィロソフィーとその実践について，コンセプトの把握とコストや技術に制約があると大山が述べている[1]．本発表では学生たちによって完成された記念映像作品を紹介し，詳細を 5 つの項目に分類し，精査する．本作品におけるプランの構築，プランにおける問題発見という視点から作品を考察し，予期した問題点の実際的な解決方法に関して報告を行う．

以下，2 章において映像制作におけるプランの構築，3 章において実際の本作品における問題発見と解決方法，4 章で考察を行う．

2.　記念映像制作におけるプランの構築

記念映像制作においてはプランを如何に構築するかが非常に重要な鍵となる．そこで本章ではプランにまつわる 5 つの項目を挙げる．「ヒト」,「モノ」,「カネ」,「情報」,「テーマ」である．

（1）ヒト：映像制作をする上では，ヒトを如何に集め，如何に機能的に作業を行っていくかが求められる．具体的なプロジェクトを遂行するにあたり，①先頭に立ち制作プロセス・道筋を示す「リーダー」となる人物，②リーダーのもとで PC や編集ソフトウェアを扱い作業を進める人物，③プロジェクトを評価する人物，が挙げられる．

(2)モノ：PC，周辺機器，AV 機器，編集ソフトウェアなどである．これらが安価で手に入る様になったということは既に指摘した通りであるが，新たに購入するには聊か予算を初期投資が上回ってしまうということが考えられる．プロジェクト終了後にはその高価な機材は誰が管理するのか，また個々人が所有して活用するのかといった問題もある．こうしたモノを安く用意するためのプランニングも重要である．

(3)カネ：専門の業者に依頼し見積もりを行ったところ，記念映像作品の制作には 30 分 300 万，1 時間 500 万円かかるとされた．限られた予算の中で工夫して完成度の高い映像作品を如何に作るかが制作者に求められる．予算を立て，それに基づきプロジェクトを進めることもまた重要なことである．

(4)テーマ：記念映像では史実や逸話などを年代ごとに取り上げ，組み込んでいくことになる．そうした中には多くの物語が存在する．その物語一つ一つをテーマと捉え，映像を複数のものとして，テーマごとに終了し切り替えていく手法と，一つの全体的なテーマの下に物語を整え，総合的な作品を作成する手法が考えられる．

(5)情報：記念映像制作における情報とは，歴史的事実・エピソードを指す．野家[2]は,『歴史とは,

過去の出来事や事実は客観的に実在するものではなく,「想起」を通じて解釈学的に再構成されたものである．時間的距離をもって存在する出来事を，われわれが同定しうるのかといえば,「想起」ないしは「記憶」の働きによってである．また,「物語る」という言語行動を通じた思い出の構造化と共同化こそが,歴史的事実の成立条件である』と述べており，歴史的事実を扱うような記念映像作品ではこうした歴史という物語の共同化を図る必要もある．

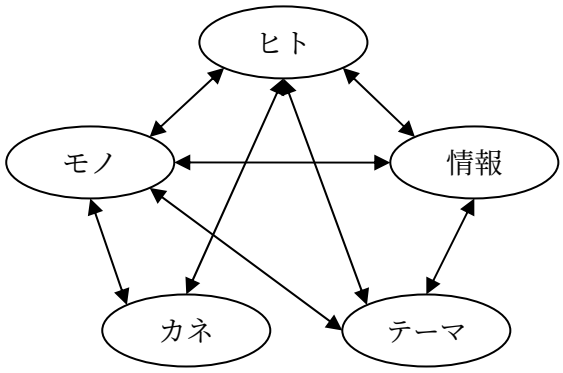


図１　映像制作における５つの項目と相互関連性

３．　プランの問題発見と解決方法例

本来，本作品は商学部の教員で構成される広報委員会及び 100 周年記念事業委員会によって制作する予定であったが，学生に自分の所属する学部について知ってほしいという想いと，学生の立場・視点による作品を求めるということから学生に制作から任せることになった．2004 年 10 月に執り行う 10 万人を越える卒業生を主たる対象とした百周年記念式典において上映されるものとして企画された．

この企画を出発点として，学生を中心として百周年映像制作委員会が組織された．

(１)ヒト：①制作する上の管理は，主に学生のリーダー中心に行うが，定期的に広報委員会及び 100 周年記念事業委員会が確認することとし，③作品評価はこの委員会で行った．②実際の撮影・編集は平易になっていると述べたが PC に関する基本知識の熟知は要求されており，実編集を行う要員を集めることは容易ではなかった．しかし，これは IT 関連を研究している学部ゼミの学生及び大学院生の協力を得ることにより問題解決することができた．

(２)モノ：本作品においては，早稲田大学 IT センター（大学内の IT 関連業務を行う箇所）から半業務用のデジタルビデオカメラ等を借用することができ,編集用の PC は大学の施設及び各人の持つ PC を活用した.学部の計らいでこれらのモノを保管する場所,作業する場所は大学内の一室を借りることができた.映像は mini-DV へ収録し，動画・静止画編集ソフトウェアには ULEAD 社の Video Studio と Adobe 社の Photo Shop, Illustrator, Premiere, After Effects を使用した．大学の機材・ソフトウェアを有効活用すること，要所では高度な編集の可能な市販ソフトウェアを利用することとした．

(３)カネ：我々は可能な限り大学所有の資材・機材を活用し，制作は学生が行い，出来上がった作品のプレスのみ業者に委託することとした．大学の機材を借りることによって殆どの予算を消耗品や人件費に充てることが可能となった.学生に対し,勉強・技術・ブレーンストーミング・グループワークといった様々な機会を当てることが出来たということも本件の特徴の一つである．参考として，予算の 2 割が DV や CD-R,DVD-R と記憶媒体などといった消耗品,7 割が人件費,残り 1 割が交通費,取材費となった．

人件費の計算方法として，当初制作スタッフの作業時間に応じた時給を計算する方法を取った．しかし，ここで問題が起きてしまった．作業時間が想定以上に長くなり，予算に見合わず，この方法の修正をせざるを得なかったのである．本来なら映像作品における報酬は，上映時間若しくは１本に対して決まるものである．凡その予算を想定し，設定後それに相当する時間給を割り振るという方法へと変更した．作業時間に応じてではなく，作品の良し悪しに対して報いる方法は制作者のモチベーションが上がり，作品の完成度も高くなることにも繋がるからである．

(４)テーマ：本作品は早稲田大学商学部の 100 年を扱ったものであり，そういった意味では凡そのテーマは確定していた．前章において構成としては２種類考えられると指摘したが，議論を通し後者の全

体で一つの物語を表す構成を選択した．全体のテーマを常に意識し，100 年の歴史を紡いできたということを表現することを目標としたためである．

我々はサブテーマとして校舎に着目することにした．この校舎こそが 100 年に渡る商学部の学生・卒業生・教職員の象徴であるためである．

設立当時は大学の講堂を借用したものを校舎としていた．そして，高等学校の校舎を譲り受け本学は正式に開校した．後の 1938 年 10 月に当時の学部長であった平沼淑郎が卒業生に声を掛け寄付を募り初めて単独の校舎を保持することになった．寄付を呼びかけたところ，短期間で目標額(当時の 30 万円)を集めることができたという歴史的事実がある．この校舎は戦争期にも奇跡的に半焼で済み，学生紛争期にもバリケードが張られるなど長きに渡る商学部の歴史を顕している校舎である．将来的には，この思い出のある校舎に代わる新たな世紀を迎えるにあたりビジネス教育，研究の発信地となる新校舎を建設することになっている．

今までの校舎の歴史を俯瞰すると約 10 万人の学生と教職員が協力して商学部の 100 年を盛り立ててきたということを実際に我々は知ることができ，誇りとその使命感を感じることとなった．

このような背景から 100 年の歴史を伝えるためには校舎を中心として構成することが望ましいと判断を下したのである．

テーマの設定により，記念作品として不要な部分を捨象することが可能になった．この他にも本学特有の昨今のカリキュラム大改革や創始者天野為之も触れることとし，全体として早稲田大学商学部の来し方行く末の描写を一つの物語として描いた．

(５)情報：多様な年代の卒業生を対象にした本作品においては歴史的事実を共同化することが困難なことであった．例を挙げると，学生紛争などは実際に体験した卒業生が多数存在し，彼らにはそれぞれの思い出，認識が存在している．その認識の相違に触れてないこと，更に，学生紛争を経験していない学生達に対して歴史的事実として共同化を図ることは容易いことではなかった．このため，教員や職員と数多く繰り返し歴史背景の確認を行った．早稲田大学の場合，大学史資料センターという大学の歴史を専門に扱う研究センターがあり，幾つかの早稲田大学の歴史に関する「早稲田八十年の歩み」[3]「都の西北：建学の百年」[4]といった書籍が発行されている．しかし，背景の理解を踏まえ作品に取り込む場合にはこのようなセンターや書籍での調査を行うだけでは解決のできない事柄が多々あり，経験者へのインタビューや生の声を聞き取るといった調査の必要性について身をもって知ることができた．

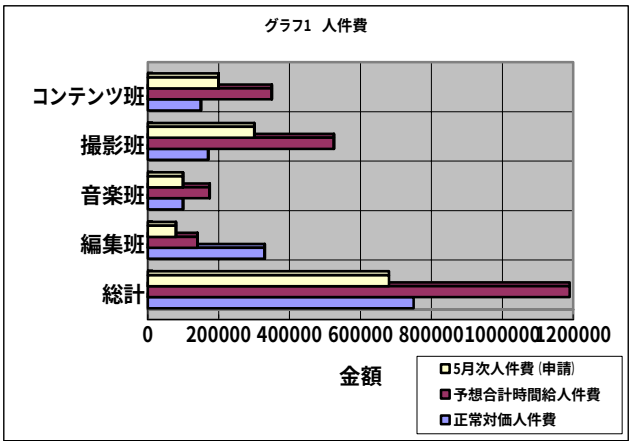
４．　考察

記念映像制作プランを如何に構築するかを 5 つの項目を用いることによって構築方法を考えていく．

(１)ヒトに関して，我々は作業を少人数で行うことを選んだ. 少人数で作業を行うということは, 個々の作業が多くなり負担も大きくなってしまうことに繋がるが，歴史的事実を扱う記念映像作品においては出来事に対する共通認識をもとに作品を構築する必要があるため，少人数であることによるメリットが大きいと考えたからである．意思の疎通を図るため，メーリングリストやメッセンジャーで頻繁に意見を交換した．更に，我々は「オフライン」即ち対面での会議に特に重きを置いた．元より普段から顔を合わせるメンバー構成であったが，役割の割り振りや取材先へのアポイントメント取りなど詳細を詰めるためにはオンラインのみであると誤解や不満が生まれやすいためである．これは作業進度を確認するのにも大いに役立った．

(２)モノに関しては，高度な編集ソフトの使用を少なくし，汎用ソフトウェアを大いに活用したことが学生のグループワーク・チームワークの向上へと繋がった．機材の扱い方・映像編集の技術に関しても制作スタッフ其々今後ここで得た知識が他の作品などに活用されることになるだろう．

(３)カネに関しては，前章で示したとおり問題が発生した．多くの大学の制度では，書類の関係上，学生に対価を払うには時間給での支払いが基本となっていることから生じた内容である．映像制作とは時間で測れるものではないということ，映像編集に



は時間が掛かるということ，専門の能力が求められる中，技術不足からくる不必要な時間や間延びしてしまうということ，社会経験の浅い学部生が大半を占める構成といったことから時間給での人件費は不適当であることを実感した．モチベーションを上げるという点においても一定額を決め，それに相当する額を時間給に変換するという方式が好ましいと考える．

(4)テーマと(5)情報に関しては，歴史に触れることになるために歴史認識の共同化を図るという点が重要となった．対面で会議を重ねることが必要であり重要である．立場の違った教職員との話し合いを検討してみるべきであろう．可能な限り多く検討することがより深くテーマに近づけることになる．技術のハードルはデジタル化やソフトウェアの汎用化によって低くなっているが，映像作品は技術だけでは完成しない．シナリオの構築などといった技術以外の側面が大きな役割を果たすのである．

最後に反響や実際の上映に関して述べたい．本作品は 2004 年 10 月 2 日に早稲田大学大隈講堂にて行われた商学部百周年記念式典の中のメインイベントの一つとして上映された．この式典は商学部卒業生が出席者の大半を占めており，卒業生自身の恩師や大学生活を過ごした時代などが流れるものであったため，内容はそれぞれに興味の高いものとなっていた．この式典において制作者である学生の舞台紹介が行われた際には学生中心で作ったことに対する驚きの声とともに惜しみない拍手が起きた．

21 世紀のブロードバンド時代において如何にコンテンツを提供するかは非常に重要なことである．立正大学学部紹介[5]や国学院大学紹介[6]のように映像作品のデジタル化によって web 上で公開するケースは増えているが，我々のように学生中心で記念映像作品を制作したことは画期的であり，また進取の試みであったと思われる．

5． むすび

本発表では，早稲田大学商学部 100 周年記念映像作品を例にとり記念映像を制作するにあたって直面した実際的な問題点とその解決方法について述べた．

今後このような記念映像作品が学生の手によって積極的に制作されることを期待したい．こうした作品制作は教育的効果に与える影響がとても大きく，情報社会で必要とされるブレーンストーミングの能力の向上やグループワークの経験には絶好の機会であると思われる．様々な問題も起こることが想定されるが，教職員と学生とが協力することにより，大概の問題は解決できるということを我々は証明したのである．

最後に，この作品を制作する機会を与えてくださり，完成までに多大なるご協力を頂いた教職員の皆様及び本作品をご覧頂いた皆様に感謝したい．

参考文献

[1] 大山佳彦・星健太郎・高橋敬隆「100 周年記念映像制作：フィロソフィーと実践」2004 PC Conference 論文集，pp. 302-305(2004).
[2] 野家啓一「物語の哲学」岩波書店（1996).
[3] 早稲田大学校友会編「早稲田大学八十年の歩み」早稲田大学(1962).
[4] 早稲田大学 大学史編集所編「都の西北：建学の百年』早稲田大学(1982).
[5] 立正大学学部学科紹介ビデオページ
http://www.ris.ac.jp/admission/video/
[6] 国学院大学紹介ビデオページ
http://www.kokugakuin.ac.jp/juken/nyuugaku/movie/